

# 彷徨へる心のままに

(昭和二十四年寮歌)

池田基君 作歌  
伊藤嘉弘君 作曲

## 序

彷徨へる心のままに  
見返りの陵を登れば  
野は遙か去にし日の面影  
簫々の闇にとけゆく  
斯くあるは人の宿命か  
天地に星の飛ぶなり

## 冬

雪の舞ふ砂丘薄れて  
光輝なき旧りし仕種は  
忘却の寄する汐音に  
消え去りぬ名残の水際  
叫ぶには余りに深く  
涙には余りに虚し

## 春

清冽の玉散る知性  
燃え狂ふ情熱の焰  
若き身の裏に留めて  
相剋の旅を逝くなり  
苦悩しみに頬を濡らせば  
春雨も楡影つたふ

## 夏

初夏の野に陽炎たてば  
痛ましき魂の疵の  
陽に癒えて幸福は希望は  
微風に咲き出づる華  
育くみし白珠の水  
浜茄の赤き血潮よ

## 秋

秋深き磯に佇み  
汐飛沫浴びし彼の時  
月影に宿命解かんと  
友垣の誓ひし言葉  
斯く故に千草ふみしき  
寥々の孤杖を運ぶ

## 結

三春秋の絢夢原始林影に  
散り果てて悲哀を秘めつ  
陵を去る遊子の瞳  
又燃えぬ愛情と決意に  
暁の新たな旅出  
永遠に時は流れぬ